

編集後記

死者を悼み葬ることは、私たちに避けられない生活の一部であるが、なんとなく控えるべき話題となつていくことが多い。ただ東日本大震災後は、メディア等でしきりに鎮魂や慰霊をテーマに報道し、筆者が大学の講義のあとに学生から回収するコメントでも、死者や魂の問題に強く反応するものが目立つようになった。

しかし、メディア等で取り上げられる内容は、はたして被災地の遺族たちを真正面からとらえたものだっただろうか。ときにそれは、過剰に同情的で、慰霊などの営みを表面的にとらえ美化しすぎているように思う。

今年度、五月十八日・十九日に開催された智山教学大会では、東北大学文学部教授の鈴木岩弓先生を招き「霊と肉と骨―現代日本人の死者観念―」というテーマでご講演いただき、東日本大震災における死者埋葬について具体的な事例をお聞きした。鈴木先生によれば、震災後、多数の死者により通常の遺体の火葬処理が不可能となり、遺体を土葬にする墓理法の特例措置が採用され、三月十一日の十日後から積極的に土葬を進め、結果二千体以上を土葬にした。死んだら土に還るという日本の伝統的な埋葬のかたちが遺族に受け入れられるだろうという行政の予想は、すぐさま裏切られ、遺族側は「お骨にしてあげたい」「お骨にして安心したい」と望み、二週後には土葬した遺体を掘り起こして火葬にする事態となったという。鈴木先生は「火葬なんてかわいそうだ」とささやかれた四十年前とは

異なり、現代では土葬の遺体をむしろケガレた、怖ろしいものと見ていると指摘された。

死体を怖れることはけっして現代特有のことではない。死者の肉体への恐怖ゆえに私たちは宗教儀礼によつて、その力を封じ込め浄化の儀式をおこなってきた。現代の人々が火葬をして安心感を得ているのならば、火葬自体にケガレ浄化という意味を込めているのだろうか。現代人にとって火葬があれば、もしかしたら宗教儀礼は必要なのではないか。私たちには、こうした問題を感情的になりすぎることなく考察し議論する必要があるだろう。

智山勸学会では、平成二十二年より「葬送儀礼をめぐる」というテーマで智山教学大会の講演や智山談話会を開催しており、今後数年にわたって継続する予定である。ぜひ会員の皆さんにご参加いただき問題を共有できればと思う。

(阿部貴子)

平成二十五年三月三十一日発行
智山学報 第六十二輯 (通巻七十六号)

編輯

大正大学真言学智山研究室

発行 智山勸学会

製作 青史出版株式会社

発行代表者 福田 亮 成

発行所 智山勸学会事務局

〒一〇五-〇〇〇二 東京都港区

愛宕一-三三八 真福寺内

電話(〇三)三四三二・一〇八一番

振替〇〇一〇〇一九二八〇三〇番